

認知症高齢者の支援 ～施設で本当の落ち着いた生活を取り戻すために～

16CC17 野口 由衣

I. はじめに

私は今回レクリエーションや、体操などに積極的に参加し、「余暇時間を有意義にすごしたい」というA様に出会った。A様は日中何もしていないことが多く、認知症状が見られた。そこで私は余暇時間にレクリエーションや散歩、運動などの介護計画を実施したため介護過程で学んだことについて報告をする。

II. 実習先種別・実習期間

介護老人福祉施設

2017年6月26日～7月28日（うち23日間）

III. 事例紹介

A様 年齢80歳代 性別：男性

要介護状態区分：要介護4

ADLは車いす自走である。コミュニケーションも行える

IV. 介護の実際

1.課題の発見と分析

職員の動きに敏感になりそわそわしてしまうことがある。施設に入所後、しばらくは歩行器を使用していたが、突然膝が痛くなり、歩行器を用いて歩くことをやめ、現在は車いすを使用し、生活を送っている

2.介護上の課題

現在の施設生活を、継続するために車いすを自走し、下肢筋力を維持する必要がある

3.介護目標

長期目標 日中安心し、落ち着いた生活を送ることができる

短期目標 (1)フロア内を車いすで自走することができ、又他フロアにも行くことができる

V. 実施及び結果

1.A様が、「なにか黄色いものがテレビのところにいる」と言われ、幻覚が見えていて「そうですね。少し散歩でもしましょうか」と声掛けをすると、「行くね。一緒に行こうね。」と言われ、体調を確認し、職員の方にも確認を行い歩いた。その後車いす自走される。途中ご自身の写真をみつけ、「写っているね」と笑顔になられていた。

2.A様が、「あそこの人が呼んでいる。もう帰らないと

いけないよ。」と言われ、「そうですね。屋上に行きませんか？」と伝えると、「うん。行こうね。」と言われた。体調を確認してご自身でエレベーターの前まで行ってもらい、屋上までいった。屋上では、「景色がいいね。今日は車多いね」と笑顔で言われていた。しばらく景色を見ると「今日は帰るのやめようかな。」と言われ、フロアに戻られた。フロアに戻られた後も笑顔であった。

VI. 考察

今回の目標である、フロア内を車いすで自走をすることができ、また他フロアにも行くことができるは、おおむね達成できた。しかし長期目標の落ち着いた生活を送ることができるという目標を達成できていないと考える。A様には幻覚がある。幻覚¹⁾とは、ないものが見える症状であり、物が歪んで見えたり、別のものに見えたりする視覚認知に関連した他の障害としても現れる。竹内²⁾は水分欠乏が7%に達すると、幻覚が起こるとし、単なる水分欠乏によっても生じることを知っておく必要がある。

「水分欠乏による幻覚」ならば、水分補給というケアで解決できる。A様の水分摂取量は1日約1000mlであり日1500mlは摂取しなければいけないので、水分欠乏である可能性がある。水分の摂取の工場があれば幻覚が消失し、A様の本当の落ち着いた生活というものが獲得できるのではないかと考えた。

VII. おわりに

今回の実習およびケーススタディを通して、A様の目標や思いに沿った介護計画の目標を立案し、介護計画の内容が利用者にとってやる気がみられるようにするための工夫がいかに難しいかを学ぶことができた。水分のケアを今後の課題にしていきたい。

参考・引用文献

1)介護福祉事典 2014年10月10日初版第1版発行 発行所：ミネルヴァ書房 編者 日本介護福祉学会事典編集委員会 P752

2)介護の生理学 2013年3月20日 第1版第1刷 発行所：株式会社秀和システム 監修者：竹内孝仁 P23